

ダイバーシティ推進委員会企画記事

「子育てパパ会計士の日常」第12回 子どものほめ方、叱り方(後編)

ダイバーシティ推進委員会 副委員長 竹中 陽介

皆様、ご無沙汰しております。諸事情により、前回の記事よりだいぶ間が空いてしまい申し訳ございません。前編に引き続き、書籍「自分でできる子に育つ ほめ方 叱り方」より、子どものほめ方、叱り方のコツをご紹介します。いきなり後編と言われても、前編なんて覚えてないよ!という方が大半だと思いますので、まずは前編のおさらいから始めさせていただきます。

前編では、子どもへの「ほめ方」を中心に子どもとの接し方のエッセンスをお伝えさせていただきました。特に、子どもの行動の善しあしによって、褒美や罰を用いて行動をコントロールしようとする「条件付き子育て」には複数のデメリットが認められました。また、ほめる際には抽象的な「おざなりほめ」や表面的な「人中心ほめ」ではなく、努力の過程や手順をほめる「プロセスほめ」が望ましい、という点も重要です。

さて、今回はほめ方よりも難しいといわれる叱り方についてお伝えします。叱り方において最も重要な点は、ほめ方と同様「罰を与える叱り

方」はNG」というところ。罰には体罰だけでなく、例えば「いい加減にしろ!」と怒鳴る、口頭による罰や、「学校の宿題をやらないと今月のお小遣いはなしね!」といったように物を取り上げる物理的な罰、「言うこと聞かないと置いていくよ!」と子どもを置いてきぼりにする行動による罰などが含まれます。どれも自分がやりがちなため筆者も動揺しておりますが、さて罰を与えて叱った場合、どのような問題が生じるのでしょうか。

子育てにおける罰には4つの大きな問題があります。

- ①より攻撃的、反発的な態度を生み出す
- ②力を使った問題解決方法が正当化される
- ③親子関係にヒビが入る
- ④罰を与えても反省を促さない

どれもなるほど、といった感じですが、この中で私が個人的に気になったのが②です。書籍によると、子育ての中で用いる罰が子どもたちに「暴力や圧力で問題を解決できる」というメッセージとなって伝わってしまい、結果として、平和的な解決方法を自分で導き出せない人

間を育ててしまうとのことです。また、このような子育てを経験した子どもは、自身が親になったときも同様に権力を行使する専制的な接し方をすることが多くなるようで、罰の連鎖は世代を超えることもわかっているとのことです。両親の接し方が子どもの人格形成に影響するというのはなんとなく理解していたつもりですが、このように具体的に指摘されると、ドキッとしてしまいますよね。

さて、それでは逆に、上手に叱るためにはどうすればよいか。上手な叱り方には4つのポイントがあるようです。

上手な叱り方の4つのポイント

- ①「ダメ!」「違う!」をできるだけ使わない
- ②結果ではなく努力やプロセスに目を向ける
- ③好ましくない行動の理由を説明する
- ④親の気持ちを正直に伝える

こうして見ると、ほめるときのコツ(努力した過程をほめる)との共通点が見受けられますね。筆者の場合、上記は理屈では理解できるもの

の、叱るときは頭に血が上っていることが多いため、ついつい「(私)それはやったらあかん!」「(子)なんであかんの?」「(私)あかんもんはあかん!!」となりがちで、困ったものです。でもそんなときも、後で冷静になってから、なるべく「あれはこういう理由で怒ったんだよ」「大きな声を出してごめんね」と伝えるようにしています。仲直りは大事。

ここまで本編を抜粋して、ほめ方と叱り方のコツをお伝えしてきましたが、書籍のあとがきにとっても大事なメッセージが書かれていましたので、皆様にご紹介したいと思います。

実際に仕事と子育ての両立で焦ったり罪悪感を感じたり、あるいはストレスを感じている母親と一緒に時間を過ごすほうが、子どもの心にネガティブな影響があることがわかっています。つまり、母親自身の心の満足度が高い状態であることが非常に大切だということです。

ここでは母親とのコミュニケーションだけに触れられていますが、父親に関しても同様ですよ。子どもが何かをやってしまったとしても、両親に心や時間の余裕があればゆっくり話し合うことができます。

特に子どもが小さい間だけでも、両親で融通しながら、ゆとりをもって子どもと接したいものです。

最後に私の所感を少しだけ。ほめるときも叱るときも子どもに寄り添うことが大事ということですが、少し大きくなった子供に対して、ときには厳しく叱ることも必要なのではないでしょうか。生きていく以上、子どもであろうと様々な理不尽が目の前に立ちふさがることがあり、それと戦うためには知恵をつける必要があります。「厳しく叱る親」という理不尽に対して、「どうすれば怒られないですむか」と考えることはそこまで悪いことでしょうか。大事なものは、子どもとのコミュニケーションを怠らないこと。日々のコミュニケーションをしっかりとってさえいれば、多少理不尽な叱り方になってしまったとしても、子どもとの関係が壊れることはないと思います。

「前半と書いてることがちがうやん!」とお思いの方もいらっしゃると思いますが、筆者の単なる感想ということで、なにとぞご容赦を。

さて、タイトルにでかでかと記載のとおり、実は今回で連載終了となります(決して打ち切りではありません)。このように公の場に文章を寄稿する、ましてや連載を持つなど初めての経験で、拙い文章だったと

と思いますが、ここまでお読みいただき本当にありがとうございました。ダイバーシティという大きなテーマを前に、パパ目線で様々な内容を取り上げさせていただきましたがいかがでしたでしょうか。ほんの数名ではありますが、この連載を楽しみにしているという嬉しい声も頂き、とても感謝しております。

それではまたどこかで会えることをお祈りし、筆を置かせていただきます。

(出典)

島村華子「モンテッソーリ教育・レジオ・エミリア教育を知り尽くしたオックスフォード児童発達学博士が語る 自分でできる子に育つ ほめ方 叱り方」、株式会社ディスカヴァー・トゥエンティワン 出版社HP:

<https://d21.co.jp/book/detail/978-4-7993-2599-5>



記事をお読みいただきましたご感想や企画記事のご提案等、何でも結構ですので、コメントをお待ちしております。

コメントはこちらから ▶▶▶▶▶

